科目ナンバリング	U-LAS05 20008 SJ40						
授業科目名 <英訳>	文化人類学調査演習 Seminar of Cultural Anthropological Research			担当者所属 職名・氏名	人間・環境学研究科 教授 風間 計博 人間・環境学研究科 助教 梶丸 岳		
群	人文・社会科学科目群	分野(分類)	地域・文化(各論)		使用言語	日本語	
旧群	A群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	ゼミナール（対面授業科目）
開講年度・開講期	2025・後期	曜時限	水2	配当学年	全回生	対象学生	全学向

[授業の概要・目的]

本演習は、文献研究とフィールドワークに基づいた、学生主体の口頭発表と議論が中心となる。

フィールドワークは、文化人類学における必須の資料収集方法である。本演習は、フィールドワーク法を体得する準備段階に位置づけられる。そのため、段階を踏んで、初歩的なフィールドワークの経験を積むことが、本演習の概要である。

まず、教員が提示した文献を読み、議論を通じてフィールドワークのあり方を考えることから始める。つぎに、学生が自らの興味関心に沿って、調査対象を選択する。さらに準備作業としての事前情報収集、人類学的な主題設定と計画立案を行う。そして、実際に京都市内や近隣地域等に調査に出かけ、一次資料を集める。対象や都合に応じて、授業時間外に個別に調査を行うことになる。最終的に、収集資料をまとめて考察し、口頭発表する。

[到達目標]

文化人類学的研究に必須である、フィールドワークの方法、資料分析、理論的考察、民族誌の書き方等の基礎を下記の手順によって習得する。フィールドワークの初歩的な技法を身につけ、論理的に分析・考察できるようになることが、演習の目標である。また、他学生の発表について、内容を的確に把握し、適切な質問やコメントができるようにする。

１）文献等を事前に収集して準備作業を行い、実践的な調査計画を立てる。
２）実地調査地に行き、調査計画に基づいて聞き取りや参与観察を行う。
３）収集資料をまとめて分析し、テーマに基づいて考察する。

単なる情報収集に終わることなく、人類学的に考察を行うことが重要である。

[授業計画と内容]

下記の手順で具体的に作業を進める。学生によって進捗状況が異なる場合には、適宜調整する。授業回数は総括とフィードバックを含め全15回とする。

１）日本語で書かれたフィールドワークの方法論や民族誌を輪読し、感想やコメントを発表する。発表内容について総合的に討論する。
２）京都市内で開催される祭りやイベント等、受講生が関心をもつ個別の対象を自由に設定する。あるいは、受講生の興味関心（工芸、農業、市場、建築、町づくり等）に従って研究対象を設定してもよい。
３）調査対象に関わる文献等を渉猟して、基本情報を収集する。資料収集おいては、授業時間外の自習が重要である。
４）教員の助言の下、個別対象から抽出した人類学的なテーマについて、文献を読む。自らの問題関心を人類学の既存研究と結びつける。
５）上記をまとめて、予備調査計画を立てて口頭発表し、全員で討論する。
６）調査地に赴いて調査を行い、現地で収集資料をまとめる。
７）調査資料を整理したうえで考察し、口頭発表する。
８）調査報告を執筆する。
９）総括

ただし、コロナ禍の状況によっては、フィールドワークを行わない可能性がある。

文化人類学調査演習(2)へ続く↓↓↓

文化人類学調査演習(2)

[履修要件]

人類学関連科目を履修して単位を取得した者、あるいは履修中の者が望ましい。
個別事情に応じて、別の年度の履修でも可とする。

[成績評価の方法・観点]

授業における発表内容・議論・最終報告（60%）、積極的な授業への参加状況（40%）によって評価する。

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

授業中に発表する内容について、自ら資料を収集し、予備的な考察を行うことが必須である。授業後、学生や教員から出された質問・コメントを反芻し、調査内容の修正や、考察の練り直しを行う。

[その他（オフィスアワー等）]

フィールドワークにかかる費用は受講生の負担となる。学生教育研究災害傷害保険に必ず加入しておくこと。
文化人類学分野で卒業論文を執筆予定の者は必ず履修すること。
なお、発表を中心とする授業の性格、さらにきめ細かい指導の質を維持するため、履修人数の上限を10名程度に設定する。

[主要授業科目（学部・学科名）]